

## 論 文

## 『浜松中納言物語』の時間表現

小 林 賢 章

同志社女子大学  
表象文化学部・日本語日本文学科  
教授

## Expressions of time in the “Tale of Hamamatsu Chunagon”

Takaaki Kobayashi

Department of Japanese Language and Literature,  
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,  
Professor

—

ほどなく明けぬる心地するに、「ここはいとつつましきかたがたあるを、早う」とすすむるもことわりと思ひつつ、わりなきに、立ち出づべき心もせず。「わが世にもまだしらざりしあかつきのかかる別れにまどひぬるかな」さるべき人々を置きて、われながらあやう夢の心地しはべるを、ただひとところの御契りに引かれてこそはべりけれ」と、泣く泣く言ひ知らすることばかりは、わが御心にもおほししるるに、「巻二」p70～p71

本節で問題にするのは、この傍線部、「ほどなく明けぬる心地するに」の口語訳である。「全集」は「間もなく夜が明けてしまふ気持ちがある頃に」、「全注釈」は「程なく夜が明けてしまふ気持ちがする頃に」と口語訳が付けられている。全く同意と言つてよい。これら両者は「明けぬる心地」の助動詞ヌルを強意と捉えていることがわかる。

それではその解釈は正しいのか。後接する中納言の和歌には、「あかつきのかかる別れ」とあるから、中納言と唐后との逢瀬の後朝の別れの時間になっていることがわかる。「ほどなく明けぬる心地するに」の後、「あかつきのかかる別れ」とあるのだから、「ほどなく明けぬる心地するに」の段階では、「あかつき」が暗い時間帯（午前三時以降）を指すことは、現在では定説となっているから、その前の時間帯（「ほどなく」の時間帯）は当然暗いことになる。

この主張に対しては、だからこそ、二つの口語訳は、「夜が明けてしまふ」と助動詞ヌルを強意に訳すことで解決しているのだという反論が聞こえてきそうである。

もう一つの問題点を考えてみよう。この二人の逢瀬は、「花いと前近くおもしろきに」と桜が満開の季節であることがわかる。現行の暦では、四月上旬といったところか。この時期、京都の日の出は、春分過ぎであり、午前五時頃と言ったところか。とすると、夜が明けるのは午前五時頃と言ふことになる。午前五時頃に夜が明ける事実を捉えて、午前三時に、「ほどなく明けぬる心地する」と言えるだろうか。無理と言わざるをえない。

動詞アクは午前三時になることを意味して使用されるのが、動詞アクの主用法であることは、自身の論で多く述べてきた。<sup>3)</sup>「ほどなく明けぬる心地するに」は単純に、「間もなく明けてしまった気持ちがする頃に」でよかったのである。こう口語訳すれば、時間は午前三時になっており、「あかつき」の時間帯になっていることはわかるから、以下の整合性に問題はない。

それでは、どうして、そのように一般的な口語訳が行われなかったのでしょうか。動詞アクが、「午前三時になる」の意味であるということが一般的でないことはもちろんであるが、ここで、動詞アクに後接する助動詞ヌが強意に訳されることには別の問題があったと思われる。

この時点で、中納言（あるいは、唐后と二人）は、アカツキの到来を知っていたのであるうか。「心地（気持ち）」とあるのだから、知らなかったのではないかという反論が考えられる。私には「心地」は「ほどなく明けぬる」全体を受けていると考える。

暁の鐘、鶏の鳴き声などで、中納言等は暁の到来を知っていたのではないか。そして、その時間の到来が、素晴らしい夢のような一夜だったから、「ほどなく明け」た「心地」がしたのではないか。

## 二

「ほどなく明けぬる」の用例を上げて、少し考えてみよう。

いかではんとおもひつゝ、としころからうして四月よひのほとにきて、ほどなく明けぬれば

(1) 182とし月もありつる物を時鳥 かたらひあへぬ夏の夜にしも（『和泉式部統』）

(2) 人のほど、ささやかにあえかになどはあらで、よきほどになりあひたる心地したまへるう、いかならむ、ものものしくあざやぎて、心ばへもたをやかなる方はなく、もの誇りかになどやあらむ、さらばこそ、うたてあるべけれなど思せど、さやなる御けはひにはあらぬにや、御心ざしおろかなるべくも思されざりけり。秋の夜なれど、更けにしかばにや、ほどなく明けぬ。（『宿木』）

(3) 例の言多く語らひたまふ。更けにける夜の名残、ほどなく明けぬる心地すれば、出でたまふも（『とりかへばや物語』）

以上、用例は三つ上げておくが、「ほどなく明く」という表現は、当然、明けるまでの時間が短いことを意味するが、その理由は、好ましい出会いやよい出来事によって、時間を短く感じる場合に使われているようである。

一節で問題とした、「ほどなく明けぬる心地するに」も中納言と唐後の逢瀬の一夜の場面で使用されている。表面上の口語訳は、「間もなく明けてしまった気持ちがある頃に」でいいのだが、「明けてみると、本当にその時間は短く感じられて」

とても訳すとこの部分の口語訳は文の背後の意味も含めて述べていることになる。

## 三

もう一つ、動詞アクの用例。

山かたかけ池に造りかけて、えも言はぬ堂のめでたき、別に立て添へて、たてまつり給はむことをおぼし急ぎて、ある時には、有明の月のいと明かきに、もろともに仏の御前にわたり給ひて、後夜起きしておこなひ給ふ折りは、明くるもの知らで過ぐべきなからひを、われも人も、いくほどの年も積もらぬに、こなたのいとなみに、いみじきことを思ひ契り過ぐすも、あさまじうあはれにかなしうのみ、見たてまつり給ふ。（『卷二』 p182～p183）

この「明くるも知らで過ぐべきなからひを」を「全集」は、「夜の明けるのも知らないで」むつび合ひ、時を過ぐす夫婦の中ではあるが」と口語訳し、「全注釈」は「夜の明けるのも知らないで共寝をして過ぐすにちがいない仲なのに」と口語訳している。両注の口語訳はほぼ同じである。少なくとも両注とも、動詞アクを夜明けと取っていることがわかる。

それでいいのだろうか。この「明くるも知らで」はどのような状態で使用されているかを考察しよう。「ある時には、有明の月のいと明かきに、もろともに仏の御前にわたり給ひて、後夜起きしておこなひ給ふ折りは」が「明くるも知らで」に関わる時間表現である。その「後夜」について、全集は、「読経・礼拝などの勤行（仏道修行）を、一日を「六時」に分けてする場合の最後の時間帯の勤め。寅の刻（午前四時頃）。晨朝卯・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六つ。『源氏』松風「入道、例の後夜よりも深く起きて、鼻すすりうちして行ひましたり」と注釈が行われている。後夜についての注釈は正しい。二人は後夜の勤めをする時間、午前三時から起きていたのだった。そのことは、「有明の月のいと明かきに」からも了解される。午前三時以降出ている月が「有明の月」だったからである。<sup>4)</sup>

となると、ここでの文章のつながり具合はどうなるだろう。

①二人は午前三時からお参りをしていて。

②「夜の明けるのも知らないで」むつび合ひ、時を過ぐす夫婦の仲ではあるがという珍妙な続き方になる。その珍妙な理由はどの辺にあるのだろうか。第一・二節で検討したことに同じ理由が考えられる。本来なら、後に二、三時間先までも同衾

していても不思議でない夫婦が、午前三時からお参りしていたというのはやはり解せない。

それに、仲のよい夫婦は夜明けまで同衾するのが普通のことかという問題がその根本にある。夫は暁の鐘とともに女の許をさるのが当時の常識ではないのか。だからこそ、『枕草子』では、女の家泊まった男が暁にする行為を「暁にかへらん人は」(六〇段)と描写していたのではないか。

時代は少し下るが、「あくるもしらで」には、こんな歌もある。

#### 秋月

380 天津空みちもやどりもしら雲の あくるもしらて月をみる哉 (『順徳院I』)

この歌は、「あくるもしらて」月を見ているのだから、明けた後まだ暗いというのであろう。つまり、この歌での動詞アケは平安時代に広く使用された午前三時になるという意味だった。

振り返って、本節の『浜松中納言物語』の用例も、その意味でどうであろうか。

「普通なら、午前三時と言えば、まだ起きてこないお二人なのに」が私解である。

#### 四

次も「後夜」である。

心深うあはれなる御物語りに、あかつき方にもなりぬ。

後夜のおこなひも御堂に入り給ひて、姫君にも、「かかる住まひなる人の、むげに引き入り、あまりもの遠きやうなるも、すさまじきものぞ。人によりてぞ心もつかふ。これはまことに、おしなべて、いかになど、すずろはしう思ひ聞こゆべきにもものし給はざんめり。もののたまはば、御答へなど聞こえ給へ」と教へおい給ふ。

明けゆくまに、月いよいよ澄みまさりて、滝の音も松風のひびきも、

(『卷三』 p282)

本節で問題となるのは、「明けゆくまに、月いよいよ澄みまさりて」の部分である。夜が明けてゆくと、「月がいっそう澄みきって」(『全集』)というようだが、実際問題としておこるのだろうか。本節はこの複合動詞アケユクを問題にする

が、まずここでの時間関係を述べておく。中納言が尼君と語らっているうちに、「あかつき方にもなりぬ」とある。アカツキガタは午前三時過ぎの意味なことはすでに述べた。

そのことが確認できると、次の「後夜のおこなひも御堂に入り給ひて」も理解できる。「後夜」の行は午前三時から行われることは既に前節までに説明した。

「あかつき方にもなりぬ」を「明け方にもなってしまう」(『全集』)や、「夜明け方になっちゃう」(『全集注釈』)と口語訳するのは、不十分であることは指摘しておく。この時点で重要なことは、午前三時なのだから、まだ真つ暗だということだ。「明け方」や「夜明け方」にはなっていないのである。

複合動詞アケユクの意味についてはすでに述べた。暁(午前三時から午前五時の間)を時が経過するという意味だった。この日は、先に、「今宵は十五夜ぞかし。」とあるから、八月十五日であった。旧暦の八月だから、一般的には午前六時頃日の出であったろう。そうすると、アケユク時間帯に予想される事態は、夜のまと言える状態かその最後の時間帯には、夜の底が少し動く程度の変化が起こっている状態ではと予想されるのである。ともかくここでのアケユク時間帯は暗いのであった。そうした時間的背景を考慮しないと、「月いよいよ澄みまさりて」という事態は起こらないことをこの節では述べておく。

#### 五

次は、「明方」である。

長き夜すがら聞こえ明かし給ふに、明方の月心細きに、空は浅緑にさえわたりて、(『巻四』 p337)

短い用例なので全文の口語訳を上げる。

長い夜通しお話し上げ、夜をお明かしになる。明け方の月が心細く光る上に、空は浅緑色に芽え渡って、(『全集』)  
長い夜の間に、お話し申し上げなされると、夜明け方の月が心細く見える様子で、空は浅緑に芽え渡って (『全集注釈』)

両口語訳に大きな差異はない。「夜すがら」は「全集注釈」に指摘があるが、用例

の限定される語だが、意味は「夜もすがら」と同じと考えてよい。ヨモスガラは一晚中の意味だが、現在のヨモスガラと違うのは、その終了時点が午前三時であることだった。<sup>(7)</sup>「聞こえ明かし給ふに」の動詞アカスは午前三時までの時間を経過する意味であった。<sup>(8)</sup>ただ、ここでの用例のように、複合動詞として使用されるときは、上接する動詞の行為を午前三時まで続ける意味になる（単独用法でも、複合語としての用法でも、本質の意味は変わらない）。

この箇所をくどく口語訳するなら、「午前三時までの長い夜の時間を、お話をなさって過ごされました。」となる。

時間は午前三時過ぎになっているのである。その時間が「明方」であった。従って、アケガタとアカツキガタとは同じ時間帯であることになり、同じ時間帯であることは、次の用例でわかる。

わかる、恋

(1) 193 いでて行くあかつきがたのまきの戸をおしあげがたのわかれかなしも

(為忠)

(2) 311 まどろまでながむる月の明方にね覚やすらん衣うつ也

こなたは月を夜もすがらながめ明しぬるに、暁がた、きぬたのをとするは、いまね覚めして衣をうつかと也。(『拾遺愚草抄出聞書』)

(1)の用例は、「あかつきがた」に「まきの戸をおしあげ」「あげがた」に別れている。もちろん、後朝の別れであり、詞書の「わかる、恋」である。「あかつきがた」は「あげがた」であることがわかる。

(2)の用例は時代がやや下ることが問題である。ただ、本歌と加注の関係は、和歌と口語訳という関係である。歌の「明方」を、注では「暁がた」といつているのがわかる。

従来、アカツキガタは「暁の頃」という意味と考えられていた。それに対し、先にアカツキガタは暁の始まり部分をいうという私見は示しておいた。

その一理由は、(2)の用例の加注部分のように、「夜もすがらながめ明しぬるに、暁がた」のように、「よもすがら」「明かす」と「あかつきがた」になるような例や、動詞アクと組み合わせられて使用される例などが多いこと。アカツキガタに鐘がなっている例が少ないがあること。などだった。従来、アカツキガタなどのカタはおおむねの時間を指すとされた。それに対する私見は、時間帯を表す語に後接するカタはその時間帯の開始時間帯を示すというものだった。

アカツキガタに比べるとアケガタの用例は多くはない。しかし、アカツキガタに対応した用例があることや、本来、動詞アクは午前三時になる意味だったが、アケガタにはその動詞アクが含まれていると思われるからであり、「散り方」などと同様に、その動詞の行為の開始時点をいうというのが私見だった。

口語訳部分の「明け方」「夜明け方」はまず間違いない。

次の、「空は浅緑にさえわたりて」の部分の口語訳である。緑色は広く青も含むことは近年言われていることである。

また、視点を変えて、現代書道の墨の種類に、茶墨、青墨などがあることは、こんにちわれわれの常識である。ただ、茶墨や青墨と言っても、墨なのだから原則は黒なのである。そこに、わずかに、赤味を帯びたり、青味を帯びたり発色する墨を茶墨、青墨と呼ぶのである。この「浅緑」もそれではないかと思う。午前三時の空であるから原則黒い。わずかに、月に照らされてか青味を帯びていた、それを、「浅緑」と呼んだのではなからうか。

## 六

最後は二つの「入相の鐘」である。

夕暮れの空、いと深く霞みわたりて、内も外も人の音もせず、かすかにいみじきに、聖の、入相の鐘の声ばかりぞ聞こゆる。

奥山の夕暮れがたのさびしきにとどもよほす鐘の音かな

うちながめわたい給ふ夕映えは、いとどしきまでめでたく見え給ふ。「今日も暮れぬとばかりは、この鐘の音に聞き過ごし侍るほどを、推し量らせ給ふこと」うち泣き給ひて、

明け暮れも山のかげには分かれぬを入相の鐘にこそ知れ  
などうち泣き交し給ふほどに、(『巻三』 p216～p217)

まず、「入相の鐘」である。「日没につくてらの鐘。晚鐘・『類従名義抄』「日没イリアヒ」と「全集」の方はごく一般的な注釈が行われている。それに対して、「全注釈」は「入相」とはたそがれ時。」とだけ書かれている。

結論から述べる。「入相の鐘」は午後五時に鳴らされる鐘だった。「全集」にも引



用されている『類従名義抄』の「日没 イリアヒ」の記述について述べる。当時、鐘は原則、六時の鐘として鳴らされた。六時は晨朝、日中、日入、初夜、中夜、後夜の、日に六回行われる礼拝・勤行のことであった。このうち、「日入」は日没とも言われていた。『類従名義抄』の「日没 イリアヒ」の記述はまさにこの「日没」だった。イリアヒの鐘が太陽の日没時になる鐘という指摘があったが、六時の鐘の一名称を普通名詞の日没と捉えたところからの珍解釈だった。

この段でも、「夕暮れの空、いと深く霞みわたりて」とあって、霞が深くかかっていることがわかる。さらに、「うちながめわたい給ふ夕映えは、いとどしきまでめでたく見え給ふ」と、霞がオレンジ色に染まって、夕ばえの光を感じているのである。あくまで、日没の状態かは不明である。むしろ、入相の鐘日没説の背景には、当時の時刻法は不定時法だったという考えが背後にあって、入相の鐘日没説が生じたのではなからうか。

もちろん、この場合は太陽の沈む姿は見えなくても、実際には霞の向こうに太陽が沈んでいるところだという反論は可能であろう。ところが、この段でもそうだが、入相の鐘に「今日も暮れぬ」と思っていることはその反論を許さないことになるのである。

## 七

もう一つの「入相の鐘」の鳴る「夕暮れ」の場面である。

今宵は二十一日にて、方違ふべかりければ、夕つ方出で給ふほど、山風涼しう吹きたるに、入相の鐘のひびき添ひたるも、吉野の山に思ひよそへらる。立ちかへりやすらひて、出でもやり給はず。

思ひ出づや見し山かけの夕暮れに心細さはおとりこそせね

いとなやましなから、すこし起き上がりて見送り給へるも、つねよりことに立ち離れにくうおぼさるるに、

住み馴れし峰の松風それとただ聞きたすにもものぞかなしき

いとかうさまことに、あはれにたぐひなき御仲の思ひを、いとほしう、暮るるままには、式部卿の宮、例の、いとあながちなるさまにかへて、今宵かならず率て隠してむとおぼして、おはしましぬめり。いかならむとぞ。

「夕つ方」に「入相の鐘」がなっていることがわかる。その後、「暮るるまま

に」とあるが、これは、「暮れるとすぐに」の意味であり、「夕つ方」とほぼ同義語である。

これらの事態が、夕方午後五時ないし、そのあと少しの時間に行われているのであった。「全集」などの注釈の問題点をいちいち問題にしないが、動詞「暮る」や「入相の鐘」の意味が違っているのだから、口語訳は問題があるのだった。

## 注

- (1) 池田利夫校注・訳『浜松中納言物語』（新編日本古典文学全集27 二〇〇一年 小学館）以下「全集」と略称。なお、本論の『浜松中納言物語』の本文引用は本「全集」によった。
- (2) 中西健治著『浜松中納言物語全注釈』（二〇〇五年 和泉書院）以下「全注釈」と略称。
- (3) 拙稿「明く考」（一九九五年 『同志社女子大学学術研究年報』第46巻）ほか
- (4) 拙稿「アリアケとアケグレ」（一九九九年 『総合文化研究所紀要』第17巻）
- (5) 拙稿「アケガタ考」（二〇〇〇年 『同志社女子大学学術研究年報』第51巻）
- (6) 拙稿「アケハツ考」（二〇一三年 『同志社女子大学学術研究年報』第64巻）
- (7) 拙稿「ヨモスガラ考」（一九九九年 『同志社女子大学学術研究年報』第50巻）
- (8) 同右
- (9) 石川常彦『拾遺愚草古注（上）』（一九八三年 三弥井書店）

